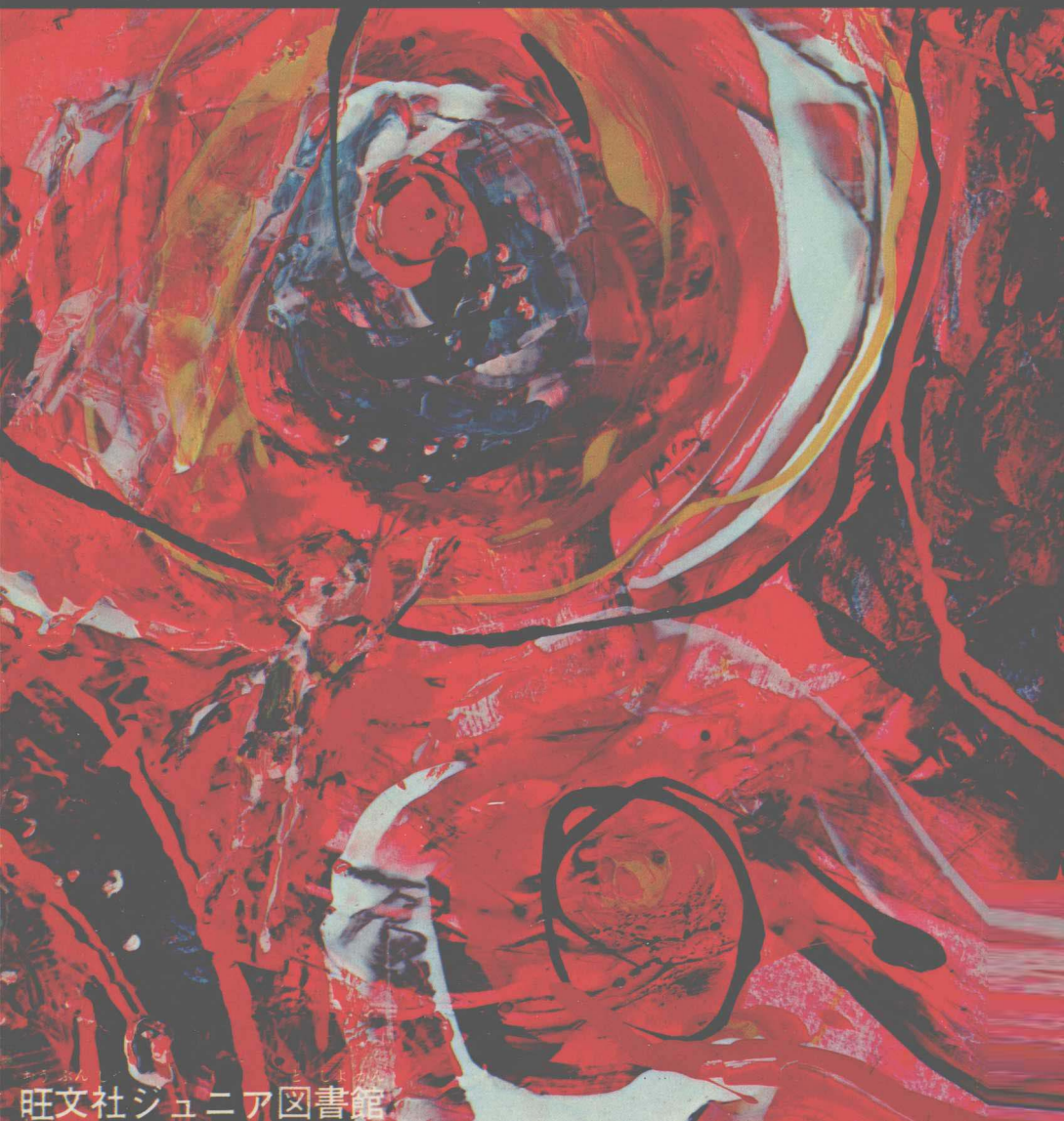
ガラスにはいった太陽

キルピチニコワ作　宮川やすえ訳



旺文社ジュニア図書館

旺文社ジュニア図書館

ガラスにはいった太陽

キルピチニコワ作　宮川やすえ訳

目次

日本の少年少女のみなさんへ　6

第一章　昔々の物語　9

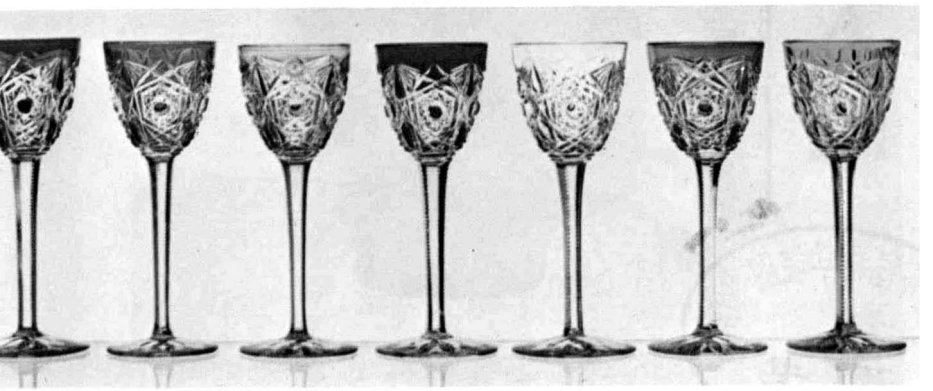
1　かぎのかかった島　12

2　家に伝わる秘法　17

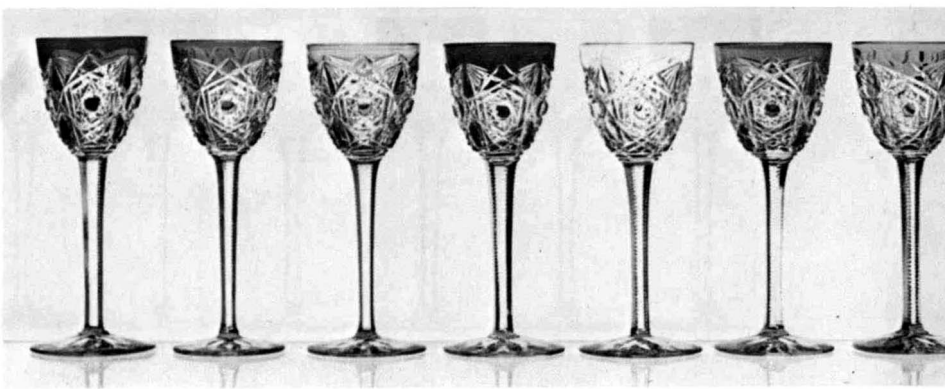
3　すかし模様のチューリップ　21

4　歌を忘れたかごの鳥　31

第二章　そして、今　41

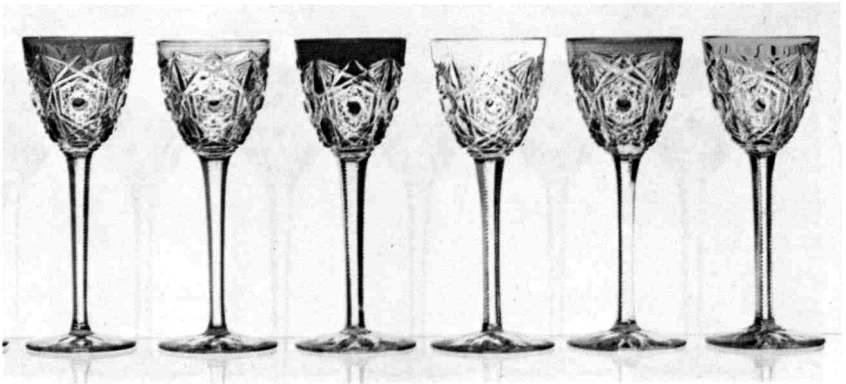


1 ガラス吹きとボルゾイ犬 45
2 お人よしの鬼たち 51
3 赤い花 59
4 新米の「はこびや」 68
5 魔法のしるし 76
6 ガラスの動物たち 85
7 ボリスカのまよい 91
8 ボリスの選んだ道 97
9 火の中にはいる 106
10 なぞを解くかぎ 113
11 ソビエトの奇跡 119



12 ガラスを吹くさおの助手 132
13 ムラノガラスの秘密 141
14 ガラスの国 148
15 ガラスの中のコルパチカ 154
16 月のガラス 164
17 果てしないガラスの秘密 171
ふしぎなふしぎなガラスの魔法　長谷川保和 175
あとがき　宮川やすえ 193

（さし絵・ボガエフスカヤ　装丁・大野隆也）



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

この物語のモデルになったイェリョーミン氏

日本の少年少女のみなさんへ

イリーナ・キルピチニコワ

わたしはずっと前から、手で物を作る人たちが大好きでした。子供時代、わたしのまわりにはそんな人がたくさんいたものです。

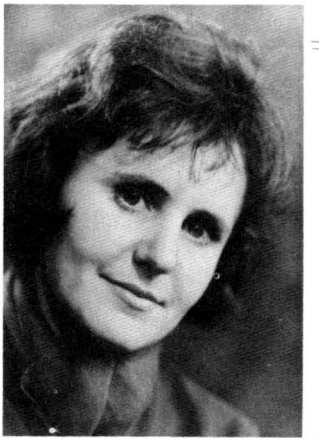
山にかこまれたコーカサス地方の町グロズノで、わたしは生まれました。ジャーナリストの父につれられて、一家はピヤチゴロスクやバクー、トビリシ、エレワンの町々に移って暮らしました。どこへ行っても、すばらしい腕前の職人に会ったものです。銅板を打って模様を刻みつける彫金師に宝石工。粘土でつぼや皿を作る陶工。彫刻師にじゅうたん作りなど、だれもかも才能のある人ばかりでした。

コーカサスの人の中で、ときたま何も作れない人がいると、みんなばかにしたようにこう言ったものです。

「あいつの手は手じゃない。ぼうかなんかほかのものが肩からぶらさがってるんだ」

「ガラスにはいった太陽」は、レニングラードでふと出会った、すばらしいできごとをテーマにしたものです。

ある時、わたしはつとめていた新聞社の記事を書くために、ガラス工場に出



Ирина Кириченкова

かけ、ガラスを作る現場を見ました。

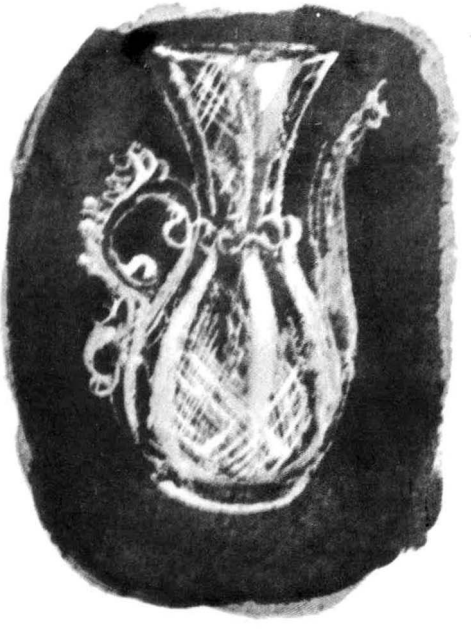
わたしは驚いてしまいました。目の前に広がったのは夢のようなファンタジーの世界でした。まるい木の舞台の上で、まるいかまがかっかと燃えています。そのまわりでは、長い金属のさおを持ったガラス吹きが、泳ぐように動いているのです。かまにさおをつけ、そこから真っ赤に燃えるガラスのたねを取り出しています。それをぷうと吹くと、思いのままのものができ上がるのです。赤い炎のひらめきが、ガラス吹きの顔を赤々とうつし出しています。さおは魔法のように、手の中でおどり続けます。燃えるたねは、小さなほんものの太陽そっくり。その太陽を、ガラス吹きは自由自在にあやつって、思いのままにかいならしているのです。

わたしはその秘密が知りたくなりました。

そこで、このガラスの秘密のなぞをもっと深く知ってみようと思ったのです。

さあ、どんな秘密があったでしょうか。読んでみてくださいね。

第一章　昔々の物語（むかしむかしのものがたり）



長

い長い冬の夜は、昔話を聞くのにぴったりです。道には吹雪が舞い、地面にはあつい雪が積もっています。戸を開けて、外をちらりとのぞいて見ることさえできません。寒くて、暗くて、恐ろしい冬の夜。こんな時にいちばんいいのは、あたたかいペチカのそばにすわっていることです。

かまでは火がぱちぱちとはじけ、煙突では風がごうごうとうなっています。めらめらと真っ黄色の舌をのばして、燃える白樺のまき。

幼いボリスカは、ペチカのそばにすわって、うっとりと火をながめています。

『なんだかペチカの中で、ふしぎなまぼろしが踊っているみたいだなあ……』

ボリスカと並んで、こしかけにすわっているのはおじいさん。

おじいさんもペチカのたき口をじっと見つめて、考えこんでいます。仕事のことや自分の歳のことなど……。

「ミハイルじいちゃん、ガラスの話をしてよ。ずっと前に約束したじゃないか」

とボリスカはねだりました。

「うん、約束したなぼうや。だけど長い長い話なんだよ。きっとあきちゃうよ」

「あきたりなんかしないよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ボリスカはおじいさんにくっつくようにして、すわりなおしました。
「じゃ、お聞き。昔々の話だよ。今じゃ本当かうそかわかる者はだれもいない……」

1 かぎのかかった島

それはずいぶん昔、何百年も前のことでした。ニッコ・ビッコニオという少年がイタリアに住んでいました。ニッコは、ベニスという町の近くの入江に浮かんでいる、緑の島で暮らしていました。その島は地図にものっていないほど、ちっちゃな島でした。島の名前はムラノ。

この島は世界でもいちばんきれいな島の一つでした。しかし、ニッコ少年にとっては、ろうやでした。

それは本当なのです。島に住む者はだれも島の外へ出ることができないのです。ニッコのような子供だって……。

ベニス共和国をおさめていた総督が、このようなきびしい法律を作ったのです。

ベニスに住んでいた総督は、ムラノを自分の倉だと思っていました。だから島の入口をぴったりとざし、番兵にいつも見張らせていたのです。

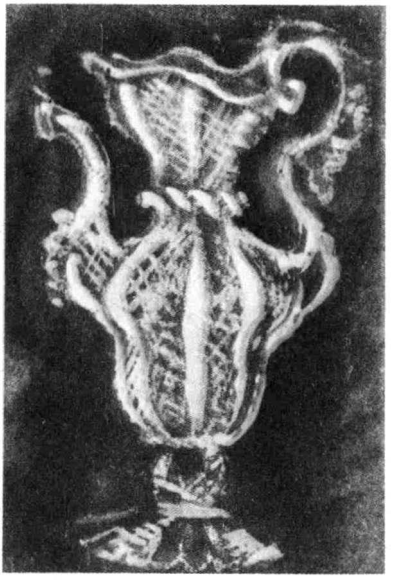
どうしてだって？

そう。それはムラノに住んでいる者はみんな、ガラス作りの名人だったからなのです。それもふつうのガラス作りではありません。すばらしい腕前の者ばかり。

みんなどろどろして火のように熱いガラスのたねを、かまで煮ていました。料理女がスープを煮るようにくつくつと……。しかし、なべのかわりに大きな土のるつぼを、火の上にのっけ、るつぼの中には、野菜や魚ではなくて、すんだ山の小川で取った、きれいな砂の結晶と、下着の洗濯に使うソーダ、それに白壁をぬるのに使う石灰をほうりこむのです。

それから、スープにパセリやこしょうを入れたらおいしくなるように、りっぱなガラスを作るには、調味料を加えなくてはなりません。調味料しだいで、ガラスは朱色や紺色になり、音がすんでくるのです。スプーンで軽くたたくと、ほら、いいガラスほど、ちろちろちろと、すずのようになるでしょう。

ガラスの材料がとけたら、ガラス吹きは長い金属のさおの先に、るつぼからどろどろしたガ



ラスのたねをひとまき、水あめのようにまき取って、しゃぼんだまのようにぷうっと吹きます。

ガラスを煮て、口で吹いたら器ができることがわかってからというもの、ガラスを作る職人が、世界中に現れ、ガラス吹きと呼ばれるようになりました。

ガラス吹きたちは、広口びんでも、花びんでも、コップでも、なんでも口で吹いて作るのです。にわとりや馬、ガラガラおもちゃまで……。

その中でも、いちばんじょうずなのは、イタリアのベニスに住んでいる職人たちでした。ベニスのガラス吹きたちは、小さなガラスの泡で、なんとも言えないほど美しい花びんを作る秘法を知っていました。この世にこんなに美しいものがほかにあるでしょうか。高さが三〇センチもあるベニスの大カップは、七色の虹のように輝き、空気で作ったように、軽くてすきとおっています。

ベニスの器ほど高価なものはありませんでした。金よりも値打ちがありました。ベニスの花びんを売る時、商人が片方のはかり皿に花びんをのせると、お客はもう片方のはかり皿に、さおがかたむいて動かなくなるほどの金貨をのせなければなりませんでした。いや、花びん一つに、はかり皿二つ、三つ、いや十ぱいも金貨をのせなければならないこともあったのです。

金貨を十ぱいのせたからって、その花びんがいちばん高いとは言えませんでした。あるベニスの花びん一つは、国一つの値打ちがあったと言われています。

戦争に負けて、財産のまったくなくなってしまった王が、花びんを一つ売ったら、それだけでまた倉がいっぱいになったということです。つまり花びん一つで国が救えたということになります。

ムラノの職人の作ったガラスは、どんなつまらない物でもびっくりするほどの値段で売れたので、ベニス商人たちが全部買いしめていました。

ある時、ベニスガラスの作り方をほかの国に教えたくない、よくばり商人たちは、総督のところへおしかけて行きました。

「総督、ベニスガラスの秘法を、だれにもしゃべるなと、職人たちにしっかり言いつけたらいかがでございましょう。ベニスガラスがまぶしいほどに輝き歌うさまを、だれにも知られないようにしたならば、わたくしたちはいつまでも外国のじゅうたんや真珠の首かざりと取りかえることができるのです。そうすれば、わたくしたちは金貨を山のように運んでまいりますから、あなたの倉は宝で破裂することでございましょう。あなたの机は世界一美しいガラスセットで飾られ、あなたの宮殿は目もくらむシャンデリアで輝きましょう」

「ふーむ、よろしい。誰にも作り方を見せないように、わしは職人の両手をくさりでしばり、だれにもしゃべれないように口をぬい合わせるといたそう」

と、総督は言いました。

「い、いや、それはいけません」
商人たちはいっせいに反対をしました。
「職人の両手をしばり上げたら、ガラスを吹くさおが持てぬではありませんか。口をぬい合わせたら、ガラスのたまを吹くことができません」
総督は頭をかしげました。さて、どうしたものだろう？　しばりあげることもできなければ、口をぬい合わせることもできないとすれば……。
「では、閉じこめたらどうじゃ」
「いいや、閉じこめてしまうこともできないのでございます。ガラス吹きに太陽を見せないわけにはまいりません。職人は太陽の光を見てガラスに輝きをうつし、海を見てその青色をガラスに加え、花や鳥やけものを知ってカップや花びんやつぼに模様をきざむのでございます」
総督は考えに考えたすえ、はっとひざをたたきました。ベニスからガラス職人を全部無人島のムラノへうつし、海岸という海岸に見張りの兵隊を立たせたのです。
ここにはあふれるような太陽の光も、海も花も森もありました。しかし島の者は外の者と会うことも、話をすることもまったくできないのです。それはちょうど島にがっしりとかぎをかけたようなものでした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com